

ONE LOVE 通信 65号

2019年4月27日発行

人生というのは、思ったようにいかなくて、いつもあれやこれやと悩むことばかり。悩み疲れて、悩むことをやめようと思うものの、ここで悩むのをやめたら、問題は解決しないのだ！だから考えなくてはいいんだ！とさらに悩み、なかなか前に進むことができない。どんな単細胞の生き物にも、きっと悩みはあるんだろうなあ。ソウリムシだって「なんで俺はメダカや金魚の生き餌にならずにちゃいけないんだ。」と世の不条理を嘆いているに違いない。

今回はそんな悩み事からスタートです。



【理想と現実の狭間で。】

97年からルワンダで義足を作り始めて、22年が経ちました。この間たくさんの人に義足を配ることができました。そしていろんなことを悩みました。義足作りのこと、運営のこと、どうしても理解しきれないルワンダ人のこと、などなど。

義足を作って渡すのはルワンダの人のため、そう思いながらやっているものの、その気持ちが相手に伝わらないこともあります。

愛をこめて作った義足も、気に入らないと文句を言う人もいます。例えば、出来上がった義足の色が嫌だと言った人がいました。完成した義足にはストッキングを被せるなどして、彼らの肌色に合わせようと努力はしているのですが、その色が微妙に違っていただけ。だから嫌だと…。その意見を聞いて気に入ってもらえるように工夫をしました。義足を、ただ作って渡すだけでは不十分だという、良い勉強になりました。

でもそんなふうに簡単に解決できる問題ばかりではあ

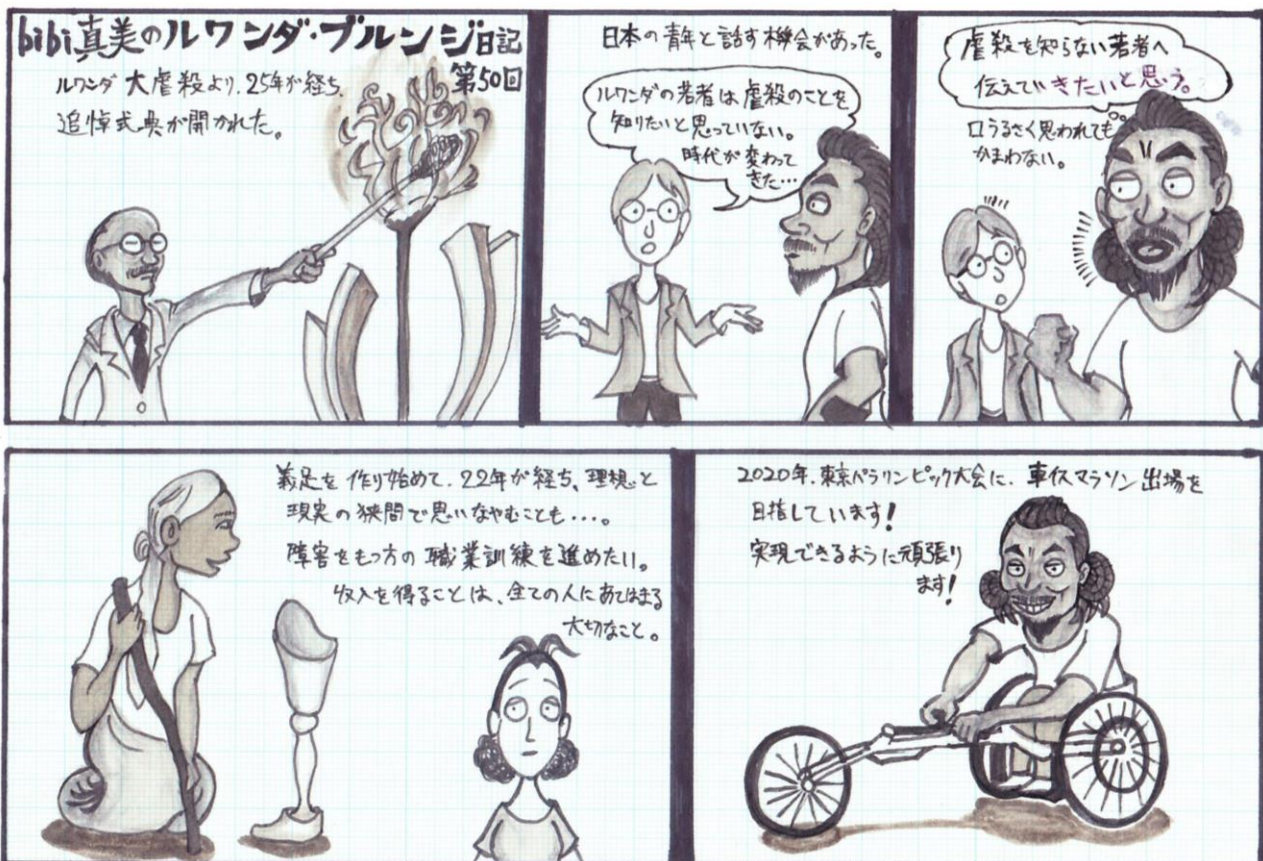
りません。ある日、道の片隅に、作った義足を立てかけて物乞いをしている女性がいきました。彼女は義足を手に入れたら、子供を育てるためにしっかり働くと言っていた女性でした。でも現実には、その義足をわざわざ目につくところに立てかけて、物乞いをしているのです。

腹が立った私は、彼女のところに駆け寄り、理由を聞きます。曰く、義足を履いたところで、大した仕事ができるわけでもない、だったら今までのように物乞いをした方がお金になる…。と。

またある人は、巡回診療の時に配った、鉄パイプで作った杖を売ってしまったという…。

こんなこともありました。外国の NGO からの支援で、車いすをもらった障害者が、ワンラブにその車いすを売りに来ました。「車いすも必要だけど、それ以上に生活するための現金が必要なのだ」と、その人は言う。結局私たちはその車いすを買い取りました。なぜならば、私たちもみんなに配る車いすが必要だったから。

そして後日、その車いすを配った団体の人がワンラブを



見学に来た時に、その車いすを発見。どうしてそれを持っているのか激しい口調で訊ね、事の成り行きを説明すると、その人は真っ赤になってまくしたてました。「これは俺たちがルワンダの障害者にタダで配った車いすだ。それをお前たちが持っている権利はない！だから今すぐ返せ！」と。

彼の言い分はわかります。私も同じように感じることはあるから。自分たちが良かれと思って、無償で配ったものを売られてしまったら、腹は立ちます。

でもここに彼らの厳しい現実があると思うのです。理想は、作った義足がすべて彼らの生活の役に立ち、大切にしてもらい、ついでに帰り際に「ありがとう」などと言ってもらえれば、こんなにうれしいことはない。

足を失った人たちの生活を改善するために、義足は必要です。それを履いて、歩けるようになり、行動範囲も広がり、人との交流も増えていく。そして人とのつながりを増やしなが、仕事を得る機会も増えていく。それは間違っていないと思うのです。

でもそれ以上でもそれ以下でもない。そして人が生きていくうえで、どうしても必要になるのが「お金」なのです。

彼らはそのお金を得るために、あらゆることをします。幸いなことに、仕事を見つけ、その仕事を一生懸命する人もいます。あるいは自分でわずかばかりの投資をして、少しずつ、少しずつお金を作っていく人もいます。



一生懸命作っても、報われない時もある…。それでもやっぱり作り続けなくてはならないのだ。やるしかあるまい！

そんな中、一つの手段として、手に入れたものを売って、現金にするという方法があります。この方法は障害を持っている人に限らず、ルワンダではしばしば使われる方法です。それらを提供する側にとっては、これをやられると腹が立ちます。でも現金収入の少ない彼らの現実を考えると、首根っこを捕まえて文句を言うことができません。

それからこんな現実もあります。

義足を作ってほしいと依頼があり、作りました。完成したので、取りに来てもらう日を指定します。でも待てども待てども本人はやってきません。今ではルワンダの人もほとんど携帯電話を持っているので、連絡を入れてみます。そうすると大抵「取りに行く」という返事をします。でもやってきません。

そんなふうにして、取りに来ないで、そのままになっている義足が何本かあります。

なぜ取りに来ないのだろう？と考えます。

もしかしたらその理由の一つとして、タダで配っているから、相手も「いつか取りに行けばいいさ」くらいに思っているのかもしれない。

ここでまた悩みます。足を失った人の多くは、仕事に就

くこともできず、厳しい生活をしている。収入のない人から、義足の費用をとることはできない。だから無償で配るという選択をしたのに、彼らは作ってもらうということを当たり前のように思い、こちらの努力を大したことないと思っているのではないだろうか、と。

だからいっそのこと、これがビジネスになればいいと思います。そうすれば、お互い対等な関係を作ることができるから。でも現実には難しいのですよね。だって多くの障害者は義足をかうためのお金を持っていない。

と、こんなふうに、いつもいろんなことが頭の中をぐるぐる回っているのです。どうしたらいいんだろう？

確かにルワンダは20年前に比べれば、豊かになっている。物も増えだし、車に乗っている人たちも増えた。生活も便利になってきたし、娯楽を求める人たちも多くなってきた。でもそれは表面的で、一部のルワンダ人にとってであり、社会的弱者の生活というのは、あの頃と大して違ってないように思うのです。

街には高級でおしゃれなレストランがどんどんできていくし、歩いている人たちはセンスの良い服を着ている。でもその裏の現実には直面して、悩むことばかりなのです。

ルワンダは「アフリカの奇跡」と呼ばれ、今も勢いをつけながら発展を続けています。それはそれで良いことなのだろうけど、置き去りにされそうな人たちのことを考えてしまうのです。ルワンダで発行されている500フラン札の裏には、子供たちがパソコンを使っている様子が印刷されており、如何にこの国がパソコンの技術を広げたいと思っているか、そういう意気込みが見受けられます。



ルワンダの500フラン札（約60円）。一人の子供に一台のラップトップを普及させようという「ワンラップトップ」政策。その思いは悪くはないけど、それよりもすることがあるのではないかとと思う次第であります。

でもその一方で、今の技術から縁の遠い人たちが、現実を前に途方に暮れているというのも事実です。

虐殺前のルワンダから、ずっと関わっている人間の一人として、この一部の人たちが恩恵を受けるようなルワンダの発展の仕方に疑問を持ってしまう。このままだと、どんどん格差ができてしまうって思うのです。

義足を作りながら、世の中の流れや、人が何を求めているかということが見えてきて、自分の無力さを思い知らされることが多いです。

これから自分たちは何ができるのだろう？どうせ義足を作るのだったら、大切にしてもらいたいし、ましてや杖の転売などしてほしくない。

そして考えて、行きつくところは、彼らが収入を得られるようになるための職業訓練を進めていかなくちゃいけないということなのです。

言うは易しだけど、実行するためにはまだまだ悩む必要

がありそうです。そしてそんなふうに思いながらも、実は案ずるより産むが易しということも、今までの体験からよ〜くわかっているのです。だから何かやっちゃおうかとも思ったりします。やれば何とかなるだろうという思いも強いです。

生きている限り、ずっと悩み続け、死ぬまでに答えが出ればいいやと、こうなったら開き直って悶々とすることにしました。そうしてルワンダの夜は更けていくのでありました。

【ちょっとしんどかった、今回の日本滞在。】

今回も無事に日本滞在を終えることができました。読売国際協力賞の贈賞式のため、11月中旬に日本に戻り、3か月半滞在しました。だからいつもより半月ほど滞在が長かったです。いつものようにたくさんの出会いがありました。初めて訪問するところも多かったです。時間と気持ちにゆとりがない私たちは、訪れた場所でゆっくり話をする時間も取れず、そのままトンボ返りということも多かったけれど、そんな私たちのことを呼んでくれる人たちがいるということに、感謝です。

そして今回は初めて大失敗をしました。時間には気を付けていたつもりでしたが、ある大学でお話をするときのスタート時間を間違えちゃいました。それに気が付いたのは新幹線の中。自分で予定表に書き込んだときは、ずいぶん遅い時間のスタートだなと思いつつ、それほど不思議に思わず、2時間遅い時間を書き込んでしまったのですね。それでもゆとりをもって出かけようと思って、早めの新幹線に乗ったところ…。

先方からショートメッセージ。何やらこっちの到着を心

配している内容。あれ？まだゆとりがあるのに、せっかちな〜と思いつつ、訪問する大学で作ってくれたチラシを見たら…。既にそのスタートの時間が目前に迫っていたのでありました…。

いや、焦ったのなんのって。新幹線から電話をし、ひたすら謝り、でももう間に合わないと言ったのですが、大学の先生がちょっと時間をくださいと。そして少しして電話をかけ直したところ、ああ、皆さん、ありがとう。何と学生さんたち、遅れてもいい、待っていてくれるって言ってくれたのです。

もうそれからはがんばりましたよ。さすがに新幹線の中を走っても、これ以上先に進むことはできないけど（でも気持ち的には、新幹線の中で走りたかった）、駅に到着したらとにかくタクシーを探し、大学までまっしぐらに行きました。

バイトがあって途中で抜けなくてはいけない学生さんもちいけど、皆さん、根気よく待っていてくれました。本当にありがとうございます。そして時間を間違えてご迷惑をかけてしまったこと、ごめんなさい。これからは自分のメモを過信せず、きちんと確認します。

そして今回の滞在は、めずらしくガテラと二人して体調を崩しました…。この3年ほど、帰国の時期が冬になり、風邪やインフルエンザが流行る季節だったけど、基本的に私たち、あまり体調を崩さない。が、今回はやられました…。

毎年訪ねている長野の小学校、今回は学校で話をする以外に、戸隠に連れて行ってくれました。でも雪。寒いっ！雪を滅多に見ることのないガテラ（私も）、そんな風景を楽しみ、お蕎麦もおいしくいただきました。しかしその日の



ルワンダ事務所代表ガテラより

【伝え続ける大切さ。】

日本の人たちにルワンダ大虐殺のことを話す。この事実をたくさんの人に伝えたいと思うからだ。その日、少しばかりルワンダに関わりのある日本の青年が言った。

「ルワンダの若い人たちは、虐殺のことなんて知りたいと思っていない。もう、そういう時代ではない。」と。

ちょっと待て。お前は何を偉そうに言っているんだ？それはお前の意見か？それともルワンダの若者の意見か？

ルワンダの大虐殺から25年、確かに虐殺を知らない若い世代は増えてきている。しかしあの出来事を伝えていくところ、同じ過ちを繰り返させないようにする俺たち大人の使命なのではないか。

人はつらいことを忘れたいと思う。そこから目を逸らそうとする。でもつらさを体験した人は、それを忘れることはできない。そしてそのつらさを知らない人には、伝えて、知らせないといけない。なぜならば同じ痛みを味わってほしくないから。それが大人の役割だと信じている。

若者が楽しみを求めるのは良い。だが突っ張っている若い若者に口うるさく意見を言えるのは、大人しかいないのだ。

日本で広島の実爆ドームを訪れた時や、東日本大震災の被災者に会った時、彼らが使命として持っていたのは、俺たちルワンダ人と同じ思いだった。

つまり「この事実を次世代に伝えていく」という思いだ。

人間は忘れる生き物である。どんなにひどい出来事があったとしても、いつの間にか過去になり、忘れてしまう。そして忘れるが故に、また同じ過ちを繰り返してしまうのだ。人は懲りない。だからそうならないために、伝えていくしかないのだ。

もしかしたらそれを聞く若者には、今は響かないのかもしれない。でも自分がその状況に出くわした時、ふと思ひ出すこともあるだろう。

だから俺は、どんなにルワンダの若者が虐殺のことを知りたくないと思っても、語り続けるのである。

口うるさい大人？結構なのだ。少なくとも俺はお前たちよりも長く生きている。そしてお前たちよりもたくさんのことを経験してきた。だから俺にはそれを語る権利があるのだ。

が、幸いルワンダの若者は、虐殺に関心がないということはない。虐殺の影響はあらゆるところに残っていて、まだ自分たちの生活にも充分関係があるからだ。だからルワンダは前に進んでいっているのだと思う。ルワンダに栄光あれ！

タ方から、ゾクゾク来ましたよ。悪寒っていうやつですか。そして二人して喉が痛い…。

しかしまだ1週間はホテル暮らしの全国巡業が続くのである。ここで力尽きるわけにはいかないのです。薬局で薬を買って、ガテラ御用達の龍角散を飲み（ガテラは粉の龍角散がお気に入り、で、ルワンダに帰る時にいつも親戚のおばちゃんに買って持っていき）、京都やら大阪、神戸・広島の日程をこなしたのでありました。私、生まれて初めてマスクというものを買いしました。

年内の日程をすべて終了し、クリスマス以降は世間も休みモードになるので、正月過ぎまでおとなしくしていただけど、甘く見ていた風邪は思った以上に長引き、結局1か月近く熱出したり、咳が止まらなかったり、拳句の果ては耳まで痛くなって、小学生の時以来の耳鼻科に行ってしまったのでありました。



初めて訪ねた伊東市では、市長さんに表敬訪問。そして議場にも立たせてもらって、うれしそうなガテラ。

いや〜、つらかったなあ。久しぶりに風邪を引いたぞ。馬鹿は風邪を引かないと、今までわけのわからない自信を持っていたが、これで馬鹿ではないという証明ができたのであるよ。そして改めて思ったのです。体って大切だなあって。

私の母親は中学の時に亡くなりました。病院や薬が嫌いで、病気になっても自力で治してしまうような人でした。そんな母親が、ある日調子が悪くて病院に行ったら、既に手遅れだと言われて、あっけなく逝ってしまった。そして父親はその反面病院が大好きで、自分の憩いのサロンであるかのように病院通いをしていた。でも足しげく通っていたにもかかわらず、病気になり、他界した。

だから病院が好きであろうと嫌いであろうと、自分の体をチェックすることは大切なのだ。いつまでも自分の体に自信をもって、気力で治そうとするのではなく、きちんと医療を利用しようと思った今回の滞在でした。

次回の帰国はまだ決まっていないけれど、今度はできればもう少し暖かい季節の時に来たいな〜。

【レーサーが手に入ったぞ！】

2020年、もうすぐです。オリンピック・パラリンピック、もうすぐです。

2000年にルワンダを初めてのパラリンピック参加に導いてから、長い時間が過ぎました。あの時のパワーと比べると、落ちてしまった部分もあるけれど、でもやっぱりいろんなことに挑戦したいという思いは続いているのであります。

今の挑戦、それは「ガテラ、東京パラリンピックに出るぞ！」作戦です。競技は車いすマラソン。65歳にしての飽

くなき挑戦なのである。

実はこれ、オリンピック・パラリンピックが東京で開催されることが決まってから、ずっと練っていた作戦なのです。日本と非常につながりの強い強いワンラブ。今までたくさんの人たちに支援してもらいながら、ここまで来ました。支援をしてくれた人に、どうやってお礼をしたら良いのか？まずは自分たちの姿を見てほしい、そんなふうに思ったのです。

ガテラはワンラブの長です。ルワンダの障害者を支援し続けてきました。彼らの生活が少しでも良くなるように、いろいろ考えてきました。例えば現在、ルワンダでは国会議員の一席に、必ず障害者枠があります。これはガテラの提案によって得ることができた障害者の権利の一つです。そして障害者スポーツの全く普及していなかったルワンダで、障害者サッカーをしたり、陸上競技のトレーニングをしたりしました。その一番大きな功績が、2000年のパラリンピックルワンダ初参加となります。その後、ずっと障害者スポーツを裏から支えてきました。

でも今回、自分が選手として参加したいという思いを持ちました。今までいろいろな形で障害者を引っ張り続けたガテラですが、言ってみれば、彼もルワンダの障害者の一人です。その一人として、参加をしたい、そう思ったのです。

今回、車いすマラソンを目指すにあたり、必要になるのはレーサーと呼ばれる車いす。シュッと長くて、かっこいい車いすです。でも簡単に手に入れることはできません。

会う人会う人に声をかけてみました。何でもよいから、それを得るための情報が欲しかったのです。そして数年前、車いすマラソンを長いこと続けている男性から、一台のレーサーを寄付してもらいました。その方が使っていた黄色いレーサーです。しかしそれで練習をしようと思うと、どうにも厳しかった。その方は両足を太もものところで切断した人。ガテラは不自由ながらも足がある。だからその足の置き所がないのです。それを考慮して足を置く台をつけてくれたのですが、どうにも不安定で、練習をしているうちに足が落ちちゃったのです。

だからつまりガテラの障害にあうレーサーを手に入れないことには、この競技をすることが難しいということがわかりました。そこで今度はストレートに「ガテラの障害にあうレーサーを支援してください」というお願いの形に変えました。

そうしたところ、ありがたいですね。数年に渡ってワンラブを支援してくれていた組織の有志の人たちが、スポンサーとなってくれたのです。

早速、千葉にある工場に体の寸法を取ってもらうために訪れ、完成を待っていました。パラリンピックを目前に控え、日本でも数少ない競技用の車いすを作っているその会社は、注文が殺到しているとのことで、出来上がりは1年先と言われました。焦らされます。でも待ちます。

そしたらうれしい連絡です。今回の滞在中に、手に入るというメールをもらいました。

だから取りに行きました。ワクワクしながら。

出来上がったレーサーは赤黄緑のラスタカラーにペイントされ、持ち主がやってくるのを待っていました。

普段は筋トレをしながら、体を鍛えているガテラだけど、車いすの競技は、初めてです。だからレーサーに乗っても、バランスのとり方がうまくいかなかったり、こぎ方がぎこちなかったりで、これから猛練習をしなくてははいけません。



カラーで見てもらえないのが残念だが、赤黄緑のラスタカラー。
これぞガテラのレーサーって感じ。カッコいいのだ。

現時点では、ルワンダのパラリンピック委員会は、2020年のパラリンピックにどの競技で参加をするか決定していません。また車いすマラソンに出たいと思っても、実際の記録があるわけでもなく、まだ競技そのものに参加したこともありません。だからガテラが来年のパラリンピックに出られるかどうかは、まったくわからない状態です。これから練習をすることももちろんですが、交渉事もたくさんあります。

でももしも出るとなったなら、どうぞ皆さん、応援してください。ルワンダの旗を持って、沿道に集まってください。みんなの声援を聞きながら、前に進んでいく。そんな光景を想像して、一人胸を熱くしている私です。

【その国の言葉。】

その国がその国らしくある理由の一つとして、言葉がある。例えば日本に日本語があり、日本語でないと表現できないような繊細なニュアンスがある。それを表現したいと思ったとしても、どの国の言葉でもそれを表現できないようなニュアンス。私はそれをとても大切に思っている。

ルワンダにはルワンダ語がある。そしてルワンダ語ならではの表現があり、なるほどなぁと頷くことも多い。

だけどそのルワンダ語が失われつつある。人は外国語を話す機会が増えた。それは植民地時代にはフランス語であり、今は英語が主流となってきた。

例えば時々出席する会議。出席する大多数の人はルワンダ人。なのにわずかばかりの外国の人間のために、英語を使って進められる。

こういうのに出席するといつも思うのです。本当に他のルワンダ人は、話している内容を理解しているのかしら？と。私は英語にコンプレックスを持っているので、英語で進められるというだけで拒否反応を起こしてしまう。

こういう傾向は年々強くなってきて、活動を始めた当時は政府から来る手紙の多くはルワンダ語で書かれていた。でも今は英語で書かれているものが多い。読むのはルワンダ人なのに、だ。

ルワンダでは虐殺の後、国外に逃げていた人が戻ってき

たので、ルワンダ語を解さないルワンダ人も多い。だから彼らのために英語を使っているのかもしれないと、想像はできる。でも微妙に違うような気がする。つまり英語を使うことによって、その人のステイタスが上がり、一目置かれるだろうという期待があるように思うのです。

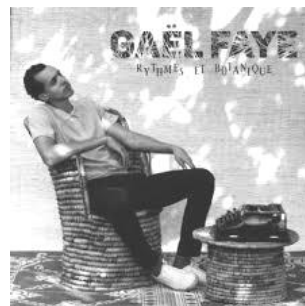
こういうのを聞くと、ひねくれている私なんかは、ケツと思うのですね。

自分たちの言葉を捨ててしまうことは、文化を捨ててしまうことにも通じると思うのだ。そしてとどのつまりは、その外国語を使う国に媚びを売っているようにも感じ、卑屈なものを感じてしまうのです。

そんな時にうれしかったのは、ガテラの甥っ子。以前フナブ通信でも報告をしたけど、彼はガテラの妹とフランスの男性との間に生まれた子。子というにはもう立派に大人になり、結婚もし、子供もいる。そしてミュージシャンとして活躍しているのだが、ルワンダの大虐殺が起こっている不穏な空気を、彼の体験を通して描いた本も出した。

彼はフランスで過ごす時間が長かったため、フランス語が自分の言葉だ。ルワンダ語は得意ではない。だから本もフランス語で書かれた。

でも彼は自分のルーツがルワンダにあると思っている。だから自分が書いた本をルワンダの人に読んでもらいたいと思った。そしてその本はルワンダ語に翻訳された。ルワンダ人である彼が、自分の体験から書いた、ルワンダの大虐殺の話だからこそ、ルワンダ人に読んでもらいたいと思ったに違いない。



ガテラの甥っ子 Gael Faye。
日本語版は「小さな国で」という題名で、早川書房から出版されているので、読んでみてください。その他さまざまな言葉に翻訳されています。

今どき、どこの国に行っても、違う人種の人たちが行き交っている。国という存在はあるけれど、どんどん違う人種が出会う機会が増えている。だからこそ、自分が生まれて育った国を、もう一度見直すということも大切だと思うのです。その文化を大切にすることというのは、つまり相手の国の文化にも尊敬の念を抱くということにつながるのではないかしら？

まあ、しかし、外国の言葉を話すということで、自分が偉くなったような錯覚を起こすのはルワンダ人に限らず、私にもある。但しそれは英語とかフランス語とか、何となくカッコいい言葉でなく、むしろマイナーなルワンダ語であり、スワヒリ語であったりする。これは理解する人が少ない分、電車の中で話をするときに、誰にも内容を知られないから便利なのです。

いずれにしても言葉は難しい。その言葉をうまく操れるようになった時こそが、人生の快感なのではないかと思う今日この頃なのだ。



雑文もろもろ

ないものねだりの日々が続いている。

ルワンダにいる時は、日本に戻ったら〇〇しよう、あれもこれも食べようと思うのだが、日本に帰ると、そんなことを追求するのが面倒になり、結局目的を果たせずにルワンダに戻ってくる。だから今回も鰻を食べるのを忘れた。

そして心身ともに疲れるルワンダなのだが、日本にいると、何となく早くルワンダに戻りたいな～なんて思ったりする。そしてルワンダに戻ると、また愚痴の日々が始まるのだ。

というわけで、人間は本当にわがままで、いつも手に入らないものを欲しがるといふ傾向にある。

にしても、例えばルワンダにいと、「ああ、あれがほしいな。これがあると便利だな。今度日本からルワンダに来る人がいたら、お願いして持ってきてもらおう。」と思うのだが、いざそういう人が出現し、何か持っていくましようか？と聞かれると、はて？何が欲しかったんだっけ？と考えてしまうのである。

自分の中で物欲がいろいろ加減なものになってきた気がする。欲しいんだけど、大して欲しくない、そんな感じ。あったら便利だけど、なくても何とかなっている、という状態なのだ。

だから物が増えるのがしんどい。片付けるのが面倒なのだ。日本にいと、あちこちで景品をもらったり、街角でティッシュペーパーなどを配っていたりするが、それをもろうのも避ける傾向にある。だって結局使わないものが多いから。

だけどルワンダでティッシュペーパーとかを配ったら、その辺のおじさんもおばさんも、こそってもらいに来んだろうなあと、その光景を想像するだけで楽しくなってくる。

だから日本でティッシュを配って、誰ももらってくれなくて腐っているそこのお兄さん、ルワンダで配ってみませんか？きっとあなたの回りには、黒山の人だかりができること、間違いありませんことよ。

と最後はくだらない文章でスマン…。

【ご寄付をありがとうございました。】

ワンラブ通信64号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（11～3月）

11月	円
12月	円
1月	円
2月	円
3月	円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	36本
装具	5本
杖	43本
車いす	1台

【ルワンダに来てみませんか？】

7月28日から8月4日（8日間）のルワンダスタディツアーがあります。お値段は¥378,000です（燃油諸税、ルワンダビザ代、ドライバーチップ等別途）。

去年初めてそのツアーのお手伝いをしました。成田からの添乗員はいませんが、ルワンダの空港では私がお待ちしています。

ガイドするのは古くからの友人、ケニア在住の早川千晶さん。パワフルな女性で、きめ細かく、そしてしっかり旅のお手伝いをしてくれます。

お宿はワンラブのゲストハウス。豪華な宿泊施設ではありませんが、利用していただくことにより、その利用費は障害者支援活動に還元されます。そしてもちろん義肢製作所もご案内します。

そしてルワンダと言えば、大虐殺のあったところ。その歴史をたどった虐殺記念館や、虐殺の跡地となった職業訓練校も訪問します。つらい歴史のあったルワンダを知ってください。

もちろんルワンダの文化に触れる機会もあります。民族博物館では、ルワンダの古い文化の紹介と共に、完成度の高い伝統的な歌や踊りのパフォーマンスも見ることができます。ルワンダならではの、男性の力強い踊りと太鼓、そして女性のしなやかな動きを楽しんでください。

お買い物好きな人は、首都で一番大きな市場で、ルワンダの色とりどりの食材を見るときに、うるさいくらいまとわりついてくる客引きのおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんと対等にやり合い、民芸品を値切ってみてください。時間があれば、アフリカの布で服を作ることも可能です。一枚いかがですか？

ガイドの早川さんは、ケニアでスラムの子供たちを支援しています。その話を聞くものためになるし、彼女の丁寧な説明はとても勉強になります。

ツアーの募集は5月31日まで。ご関心のある方は、こちらまで↓↓↓

株式会社たびせん・つなぐ（03-5577-6300）

【旅行企画・実施】株式会社タビーズ（観光庁長官 登録旅行業 1906号）（この旅行は、株式会社タビーズが企画・実施するもので、株式会社たびせん・つなぐは受託取り扱いをしています。）

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、ボランティアも常時募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、未使用切手は下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要の場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信65号 2019年4月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project